5/28 赤旗

戦前、北海道大学の学生だった宮澤弘幸が軍機保護法違反の無実の罪で特高警察に逮捕された「宮澤・レーン事件」（1941年）。その教訓を現代にどう生かすか、「宮澤・レーン事件を考える会」の山本玉樹代表幹事に聞きました。

（伊藤佑亮）

「考える会」代表幹事 山本玉樹さんに聞く

戦前・軍機保護法 無実の罪で学生逮捕

「宮澤・レーン事件」の教訓をいま

「共謀罪」重なる ねじ曲げ

事件当時、工学部2年の宮澤は向学心旺盛な学生でした。サハリン（旧樺太）、千島列島、道東などを見聞して回り、北大からのあっせんで、サハリンの港湾工事現場で労働実習もしていました。

若い命冤罪で

宮澤と北大英語教師のハロルド・レーン先生（20年、米国から来日）との結びつきは、レーン先生が中心となってつくったソシエテ・デュ・クール（心の会）という、学生と教官が自由に交流する場で生まれました。

そこは政治、経済、文化について自由にディスカッションでき、当時の札幌で一番の洋菓子店のコーヒーが自由に飲める、クラシック音楽も自由に聴けると、学生に一番人気がありました。

レーン先生は第1次世界大戦時、米国で兵役を拒否し、北大で反戦平和の思想を伝えました。それは札幌農学校（北大の前身）のクラーク博士からの教えであるヒューマニズムの根幹をなすもので、反戦平和を貫いたレーン先生を最も尊敬していたのが、宮澤だったのです。

特高は、「心の会」を危険な組織だとしてレーン先生を尾行していました。41年12月8日朝、太平洋戦争の開戦を知り、レーン宅を訪れた宮澤を、特高はスパイ容疑で逮捕しました。

特高は、サハリンや根室の海軍飛行場などの見聞をレーン先生にもらした「スパイ行為」とでっち上げます。宮澤は軍機保護法違反で懲役15年の刑に処せられました。

宮澤は零下20度、30度にもなる網走刑務所へ収監され、たくあんと麦飯という粗末な食事しか与えられず、結核を患いました。戦後GHQ（連合国軍総司令部）の命令で釈放されますが、結核がもとで27歳の若さで亡くなります。

歴史から学ぶ

「共謀罪」法案の審議で、金田勝年法相は「一般市民は処罰の対象にしない」とくり返しています。しかし判断をするのは政府や警察です。私的な通話を傍受して、警察が「テロ行為だ」と勝手な判断で逮捕できるようになってしまいます。

戦前の治安維持法は当初、国民の治安を害するようなこと以外に乱用しないと言っていましたが、歴史をみたら乱用どころか、もっとも悲惨な弾圧法として機能し、作家の小林多喜二たちを殺していったのでした。

北大は長く宮澤・レーン事件を冤罪（えんざい）と認めませんでしたが、私たちの長年のたたかいで、最近、ようやく冤罪と認めるようになりました。

戦争は事実をねじ曲げるところから始まります。先輩の志を忘れず、あの暗い時代に逆戻りさせようと狙う安倍政権に立ち向かわなければなりません。